

分野： (3) 気管支ぜん息・COPDの動向等に関する調査研究
① 気管支ぜん息の動向等

(3)-①-i)

申請課題名： i) ライフサイクルから考えるぜん息の長期予後と寛解・増悪に関わる因子の解明に関する研究

調査研究代表者氏名：藤澤 隆夫

1 評価項目						
5点: 大変優れている(A判定) 4点: 優れている(B判定) 3点: 普通(C判定) 2点: やや劣っている(D判定) 1点: 劣っている(E判定)						
	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
(2) 研究成果目標の達成度	1人	2人	3人	0人	0人	3.67
(3) 研究計画の妥当性	1人	4人	1人	0人	0人	4.00
個別評価(第3評価):(2)(3)の平均						3.83
(6) 総合評価(第2評価)	1人	4人	1人	0人	0人	4.00
全体評価(第1評価):(2)(3)(6)の平均						3.89

2 記述評価

- ・目標症例数の達成に努力されたい。
- ・COPD合併については読影の信頼度はどうなのかが極めて重要である。
- ・着想は良いと思うがコホートごとに得られる例数が不足している点が残念である。今後、統計学的に妥当な例数を獲得するための方策を立てることが重要である。本研究のベースにある疑問が少し明確でなくなっているように感じる。今一度、研究が明確にしている疑問とその回答へのアプローチを整理して他者への理解を深める工夫をしてほしい。レセプトデータの解析は近年普通に行われているが、そこで得られる結果をそのまま真実として一般的な結論へと拡大解釈することには慎重であるべきだと考える。糖尿病について考えても、重症度、合併症、病型、コントロールの状態など変数があり、層別解析を必要とする命題だと考えられる。本研究の内容をヒントに実際の症例を対象に検証することが必要だと思う。そして、この方向での検討は自施設で始めたということで、普遍化へと進むことを期待している。
- ・困難な課題ではあるが、引き続き、粘り強く調査研究が続けられることを期待する。
- ・ぜん息の長期予後と寛解増悪因子の検討である。
- ・それぞれの研究は、それなりの成果が得られている。全体として、あるいは、小児、成人に分けて、予後因子を整理して、わかりやすく社会への還元の方法や内容を考えてほしい。
- ・本研究ならではの成果が得られている。特にコホート1において、COPD診断率の高さが示されている。最近、肺の未発達がCOPD発症に大きく関与する可能性が呈示されているが、本結果も部分的な因果関係があるだろうか。
- ・解析に用いたデータの有用性を示すために、各コホートにおいて、母集団から解析対象が絞られるまでの追跡状況のフローを明確して、結果の妥当性検証が可能となるように、データの特徴を詳細に記述することが必要であると考えます。